

〈翻訳〉

## メランヒトン『道徳哲学概要の献呈書簡』(1537 年)

Christiano Pntano.

Philippus Melanthon Christiano Pontano Witbergensi.

菱刈 晃夫

クリスティアヌス・ポンタヌス (Christianus Pontanus 本名 Christian Brück, 1516 頃 -1567) は、ザクセン選帝侯の顧問官も務めた、優れた法律家グレゴール・ブリュック (Gregor Brück, 1483 頃 -1557) <sup>(1)</sup> の息子である。メランヒトンの下で学んだ。1538 年に『道徳哲学概要』(Philosophiae moralis epitome) はシュトラスブルクで出版される <sup>(2)</sup>。従来通り、道徳哲学の有用性について説くと共に、尊敬するグレゴールへの賛辞も、ここには含まれている。メランヒトンの法思想形成の中で彼らが果たした影響等については、今後の研究課題としたい。なおラテン語テキストとして CR3, S.359-361. を用いた。あわせて Kusakawa Sachiko (ed.) / Salazar, Christine F. (trans.) : Philip Melancthon. Orations on Philosophy and Education. Cambridge 1999. S.139-143. の現代語訳も参照した。

\* \* \*

クリスティアヌス・ポンタヌスに宛てて

フィリップ・メランヒトンからヴィッテンベルクのクリスティアヌス・ポンタヌスへ

ソクラテスのその他の罪の中で咎められているのは、つまり、自然探究を遠ざけ自然学を認めずにして、人間研究を (stuida hominum) 道徳〔人間の在り方・生き方〕に関する議論へと向かわせたからです。こうした濫訴をクセノフォンがもっとも激しく反駁し、そして証言しています。彼は人々を自然学から遠ざけはしなかったが、彼はこれを道徳に関するより重要な教育的な学問へ向けたのだ、と。これは他の人々からは蔑ろにされていたいましたが、確かにこの部分〔道徳哲学・倫理学〕は、人生にとってもっとも有益であり、方法とわざ〔学芸〕(methodo atque arte) による成果なのです <sup>(3)</sup>。というのも、たとえ道徳に関する共通の教え〔原理・規則〕が一般に知られているにしても、

そして大部分は私たちと共に生まれる〔生まれついている〕にしても、それにもかかわらず多くの考えられるべき義務に向けて、そして正しい行いと正しくない行いととの間の認識されるべき真の区別に向けて、さらにこれらが理解されるべき源泉に向けて、わざと何らかのより教育された学問が疑いなく必要なのです。人間の自然本性は吟味されなければなりません。おのおのに適切なものとは何か、自然から個人に帰されている務めとは何か、熟考されなければなりません。最後に自分の〔固有の〕行為の原因が探究されなければなりません。ソクラテス自身、クセノフォンの著作で摂理について議論しながら、自然における神性の痕跡を集積し、指し示していますが、それは神が存在することを説得するだけでなく、神は人間の事柄を配慮しているのを納得させるためなのです<sup>(4)</sup>。こうした議論の源泉は自然学に(in Physicis)にあります。それゆえにクセノフォンがソクラテスを弁護するように、同じく私たちもまた、道徳に関するこの哲学の部分を教える際に、若者たちがその他の哲学から遠ざけられるのを意図するのではなく、むしろ誘うようにするのです。この作品の初めて読者は、道徳に関する教えでは学芸〔わざ〕が必要であることへと導かれ、これはあたかも自然学に由来する細流であることが思い起こされるのです。それゆえに、その他の哲学の部分なしにだれかがこの分野で大家(artifex)と認められる、そう思われてはならないのです〔つまり自然学(自然哲学)を知らずして倫理学(道徳哲学)の大家とはなれないのです〕。

ところでこの部分、つまり法と正義の起源が含まれるところでは、そこから大部分の原理を法律家のみならず、神学者もまた借用しているのですが、道徳や市民の生活習慣について議論するたびごとに、確かにその有用性の大きさが要求するように、骨折るべきでありましょう。もし私たちが学芸の影ではなく、確かな学問を求めるなら、疑いなくその他の哲学〔自然学〕と繋げられることが必要となるでしょう。それゆえにこの概論で、私は遠くに離れてしまうのを望みはしませんが、それでも多くの箇所を故意に自然学の問題〔学説〕と関連づけました。それは道徳に関するこうした議論がその他の哲学なしには不具合なものであり不完全なものであることを、実例が明示するためです。次いで私は、こう判断します。決して道徳はより寛大な〔穏やかな〕ものにはならない、つまり、もともとエーティコンと呼んでいるものにはならない、と。すなわち、もし一般の教え〔原理・規則〕に自由な学問(liberalis doctrina)〔人間を自由にする学問：自由学芸〕が加わらなければ、節制〔自制・慎み深さ〕や甘美さ〔穏やかさ〕はもたらされることはない、と。これによって私たちは磨きをかけられ習慣づけられて義務の真の原因を見通し、理性によってすべての行いを制御し、穏やかさや上品さによって〔すべ

ての行いを〕いわば和らげる〔これらに趣を添える〕ことができるのです。こうしたことには〔結果として〕次のような力があります。つまり、もし適度な〔平穏な〕自然本性がこのようにして教育され習慣づけられれば、その人たちは私的な交際においてより快く〔魅力的に〕なるだけでなく、国家におけるもっとも大きな仕事でもより慎重深くて注意深くなる、ということです。というのも何という嵐が、何という動乱が、ときおり愚かという他の理由なくして人々を駆り立てることでしょう。彼らはこの学問の類によって鍛えられておらず、あるいは、ちょうどギリシア人が呼んだように、節操がないのです。したがってアリストテレスの倫理学を説明したとき、このコメントを付加したのですが、その中で、アリストテレスの見解に従うだけではなく、その方法にも従う、と述べたのです。私たちの時代に多く適合する何らかの議論を付加したのも本当です。それを私は集めました、それらが道徳に役立つと思ったからです。そしてそれらは多くの共同体の問題について判断を形成し、さらに学生たちを市民法に向けて、そして神学の教えの部分へと準備するからなのです。これは市民の義務に関する教え〔原理・原則〕を含んでいます。ある人は他の学派を賞賛しているのは知っています。なぜならストア派は少なからず半神を仰いでいます。ヴァッラは、その他の哲学者を狂ったように非難しています。それでもエピクロスにはあからさまに拍手を送っています。しかしながら私は、こうした学派の議論を長くたびたび行いましたが、ちょうどプラトンがそうなるのを戒めているように、そのときどきで議論を上下にひっくり返してしまいますので<sup>(5)</sup>、若者には大いに次のように勧めます。ストア派やエピクロス派を退け、ペリパトス派を喜んで受け入れるように、と。なぜなら、これらが擁護される場合、述べましたように、エピクロス主義やストア主義は見ばえよくされます。そのためには多くの詭弁術が付加される必要があります。エウリピデスに従えば、「不正な言葉は、それ自体が病んでいる。賢明な治療薬が必要だ」<sup>(6)</sup>。さらに誤った見解は道徳を損ないます。そして詭弁術の習慣は多くの仕方では有害です。判断を損ない、魂〔心〕を固有のシンプルな真実への愛や熱意から引き離し、才能〔気質・素質・資質〕(ingenia)を、異常な見解を愛するように、さらに物事を解明するのではなく、覆い尽くすよう、習慣づけてしまうのです。それに対してアリストテレスでは方法が議論を支配しています。そしていわば限界内に抑制していますので、議論からも正しい道からも外れることはありません。そういうわけでこれは正しい見解をその秩序によって明るみに出し、正確に説明するのです。それゆえに正しい見解と方法という事例のゆえにペリパトス派はより有益なのです。アリストテレス自身が、こう言っています。人生や道徳に少しも有益でない見解は退けられるべきで

ある、と。ところでストア派の多くのものは、すなわちアパテイアについて、運命について、その他もろもろについてといったものです。そしてだれかが自分で何年ものあいだカルネデアス〔の講義〕を聞いたと賞賛される場合、だれかがこう付言しました。どれほど長いあいだ聞いたかではなく、カルネデアスが年老いてから聞いたかどうか、吟味されなければならない、と。そのときにはもうカルネデアスの議論は見せびらかしや賞賛を得ることのために準備されていたのではなく、有益性と物事の解明に定められていたからです。あるいは、プルタルコスが言うように「有益で社会のためになるもののために」<sup>(7)</sup>です。したがって学問の様式を選ぶ場合には、真の、シンプルな、確かで、明瞭で、人生に役立つものが選択されなければなりません。私は若い素質はとくにアリストテレスの学問によって教え込まれるべきだと思います。この資性においてこれは残りの学派に勝っています。なぜでしょうか。なぜならこれによってアリストテレスの倫理学は愛されるべきだからです。これだけが徳とは中庸（mediocritates）であることと見て理解しているからです。この記述によって彼はもっとも教育的に（eruditissime）、精神の衝動が中庸へと向け変えられ、そこに呼び戻されるべきであると忠告しています。たとえこの小著にそれを完成する時間は私にはないにしても、それでも私は非常に有益な事柄を共に含めました。この出版を求める人々に私は抗うことはしませんでした。しかし議論する中で私はしばしば限られた子どもの的な弁証法的方式をまねました。それはこうした判断によって行いました。方法的で弁証法的な規則の実例がこれらのより快い主題の中で提示されるようにするためです。そして私はこの教授規則が学校にとっても有益であると判断しています。ゼならこれらは〔子どもがもつ〕素質〔資質〕を〔問題を解決する〕説明の中で適切なものへと習慣づけるからです。これ〔適切であること〕は大きな深刻な問題において、とくに必要とされています。

しかしながらあなたに、わがポンタヌスよ、この小論を捧げました。まず、あなたの父上に、もっとも傑出された方に、非常に多くの恩義があるからです。私はこの私のあなたの熱意に対するしるしが父上にも喜んでもらえると思っています。次に、あなたの才能についても私はよく知っています。私はあなたに手紙を書くのをとくに望んでいました。それはあなたに、そしてあなたの同僚に、私たちの生徒に、この教えの種類がとくに若者たちに関わっていることを、助言するためです。そして実際、どれほどの榮譽であるか、道徳におけるこの中庸が、どれほど美しいものであるか、これを私たちは正確にはエーティケーネ〔倫理的〕と呼んでいます。これはもし青年時代からずっとこの自由な学問によって精神が教え込まれ〔訓練されて慣らされ〕なければ、さらに衝動

を抑制し支配することを学ばなければ、決して理解されるものではないのです。さらにこの〔中庸の徳の〕美しさは、規則の実例が思い出されるのを私たちが注視し、その中で見事な徳が輝く場合、より容易に理解されます。そしてあなたには確かに家庭にもっとも完璧な実例が与えられています。すなわち、あらゆる義務に際しての父上の中庸と徳の卓越性です。父上の中では、才能の優秀さが多くの偉大な学芸の教えにさらに加わっていて、すべての弁舌が雄弁による賞賛でいっぱいにされていて、さらに国家を統御する知識は、彼の才能に、私が述べてきたような活動に、どれほどの榮譽そのものを加えることになるでしょう。なぜなら彼個人の中にはいわばすべての義務において中庸と優雅が輝いているからであり、それゆえにその他の才能の飾りがより多くの価値と恩恵をもつことになるのです。とはいえ〔彼の〕自然本性には大きな力がありますが、それでもこの倫理的なるものには、さまざまな学問、さまざまな教養なくして、優雅さが従うことはないのです。彼がどれほど最高の学芸への熱意によって燃えていることか、あなたは分かっています。法の知識に、この点に父上は卓越されていますが、これほど多くのキリスト教の教えを関連づけておられます。それは父上がこれを最高に理解され、すべてを敬虔によって尊重されるがゆえであります。父上にあってはすべての時代の歴史を知ろうとする貪欲さといったら、どれほどのものでしょうか〔すさまじいものがあります〕。ちょうどホメロスがオデュッセウスにおける弁論の雄弁の才と豊富さをとくに賞賛しているように、また冬の雪〔降雪〕と彼を比較しているように、あなたの御父上であるグレゴリウスの雄弁は、計り知れない知識の豊富さと多様性によって装備されていて、すべての知識人の中では最高の賞賛を得ているのであります。これほどの素晴らしい賞賛を、御父上の道徳〔生き方や在り方・振る舞い〕における調和と中庸が驚くほどに飾って〔これに榮譽を与えて〕いますが、これこそを私たちはエーティケーネ〔倫理的なるもの〕と呼んでいるのです。私は確かに、彼を見る度ごとに、私がかの古の英雄的な男たちからだれかを見ているかのように思われるのです。彼らはその知恵、教え、雄弁、政治的な知識、振る舞いの威厳と共に優雅であるがゆえに、国家において最上位を占めていました。ローマのラエリウスやクラッススあるいはケケロー、アテナイのペリクレスやその他の人々がそうであったことを私たちは読んだのでした。それゆえに御父上の中に、わがポンタヌスよ、すべての精神とすべての心をもって、見つめてください。そして、それと共に〔彼の〕道徳〔生き方・在り方や振る舞い〕の中にもっとも美しい姿を理解することを学んだなら、それを模倣しようと努力してください。なぜなら、この実例はすべての人々に共通のものであるとはいえ、それでも、御父上はあなたによ

り近く触れ合っているのですから、より力強くあなたの心を動かさなければならないからです。あなたを御父上の名による権威が駆り立てますように！あなたの中にも何らかのこうした徳の種子が伝授されていると私は思っています。これがあなたを学芸と理性によって温かく育み、駆り立てて教育しなければならないのです。同時にさらに、御父上のそれほどの榮譽が、その多くが彼の自然本性によるものであるとはいえ、もしこうした教養やさまざまな種類の学問によって磨きをかけられていなければ、なし遂げられえなかったとあなたは考えるべきです。というわけで〔あなたの〕すべての才能と精神の力をこの学問に集中させなさい。そのもっとも情熱的な熱意をあなたのご自宅で〔御父上の様子によって〕ご覧になれます。これを確かに、結果として国家もまたあなたがこれを行うように多大な関心をもって駆り立てています。こうした教養および学芸は、そこへあなたの御父上が目標として定めたものですが、これらは必要なものだからなのです。ですからあなたの精神のすべての努力でもって準備してください。そうすればいつかあなたの才能は国家にとって有益なものとなれるときがきます。こうしてあなたもまた御父上による大きな義務の上に成長することになるのです。お元気で。ヴィッテンベルクにて、1537年。

#### 注

- (1) Cf. Sächsische Biografie 「Gregor Brück」 Biografie von Gregor Brück (1485-1557) - Sächsische Biografie | ISGV e.V. (2021年12月19日)
- (2) 拙著『メランヒトンの人間学と教育思想—研究と翻訳—』成文堂、2018年、171頁以下、参照。
- (3) クセノフォーン『ソクラテースの思い出』佐々木理記、岩波文庫、1974年、24頁以下、参照。
- (4) 同上書、49頁以下、参照。
- (5) 『プラトン全集9』岩波書店、1974年、197頁。『ゴルギアス』511a.
- (6) 『断片』354.
- (7) プルタルコス『モラリア』791B.

#### 謝辞

本研究はJSPS科研費JP19K00112の助成を受けたものです。